

# 中学校 3 学年国語科学習指導案

日時：令和 7 年 9 月 30 日（火）

場所： 3 年 B 組教室

学習者： 3 年 B 組（35 名）

授業者：稲田知陽研究生（印）

（指導教諭 加儀修哉教諭）

## 1、単元名 シン・言葉をつかむ

（「作られた「物語」を超えて」（光村図書『国語 3』））

## 2、単元設定について

### （1）育てたい能力に関する生徒の実態と目指す方向【生徒観】

現代社会は多様化が進み、共生社会が形成されつつある。B 組の生徒は、共生社会を生きる中で様々な立場の人を受け入れたり、英語などの言語を使用して交流をしたりしようとする能力は高いものの、多様な立場の人に寄り添うまでには至らなかったり、自ら進んで視野を広げることには抵抗感があったりするように見受けられる。また、グループ活動では意見が出やすいものの、クラス全体での発言量は少ない。本単元を通して、視野を広げ、自らの意見を醸成する能力を育てる。同時に、言葉についても感覚を鋭くし、その功罪や使用する語の選択にも意識的になるような姿勢を養いたい。また、グループワークを随所に取り入れることによって、意見交流によって考えを深めたり、多角的な視点を養ったりすることを目指す。

### （2）教材の捉え方/教材化にあたって【教材観】

#### ・教材文の分析

本教材の特徴は、堅固なようでいて危うさを持つ言葉の二面性に気づかせるため、筆者が用意した具体例ゴリラの記述が魅力的であること、そして、そこからの一般化が実にスムーズであることだろう。本論の前半で語られる 40 年余りアフリカに通いながらジャングルでゴリラと生活をしてきた筆者の体験談は、作りものにはないおもしろさがあり、思わず文章に引き込まれる。「物語」というキーワードを示すことで、人間の一方的な誤解により命を奪われたり劣悪な環境に閉じ込められたりしてきたゴリラの運命に対する悲哀と怒りが、決して過去の人間達の罪に留まらないことを知った読者の感情が大きく揺さぶられる。ゴリラという具体化によって、本編後半で展開される主張への一般化、抽象化が鮮やかである。人間は言葉を発明し知性を発達させてきた、言葉は情報伝達のために必要不可欠なものであり、人間が自分の気持ちを伝える信頼できるコミュニケーション手段である、という無意識の思い込みに疑問を抱かせ、新たな視座を提示するという論理展開が円滑であることである。どんなに客観的な説明や描写を心がけたとしても、人間は自分の受けた印象に影響され間違える危険性がある。言葉は万能であるからこそ万能でないことを、読者に自分で気づかせる、その論の流れが見事である。

言葉については、筆者は次のようにも語っている。「言葉の効用はまず『見えないもの』を聴覚に移し替えて視覚に再現し、隠されていることを知ろうという欲望を引き起こしたことである。言葉には重さがないから、どこにでも持ち運びできる。遠くにあって見えないこと、過去に起こって体験できなかったことを、言葉で再現してまるで見たことのように感じさせることができる。まさに、言葉は時空を自在に飛び越える力を持っているのである。／言葉のもうひとつの能力は、世界を切り分けて、カテゴリーに分類する力である。空と大地に、海と岸に分けて、そこに境界を引く。植物を根と幹と枝に分け、実と葉とを分類し、用途を付与する。もちろん、サルや類人猿だってそれらの区別はできる。しかし、言葉で命名することによってその違いは鮮明になり、それぞれに意味を持たせることができるのだ。たとえば、昨日と今日の空は違う。昨日は一日中太陽が

照っていたが、今日は朝から曇っていていずれ雨が来るだろう。そして川は増水して渡れなくなる。同じ空でも様子の違いが次に起こることを予感させる。言葉はひとつひとつの出来事に意味を付与してつなぎ合わせ、物語にして仲間と共有させる。おかげで私たちは自分が経験していない過去の出来事を、仲間の言葉から学ぶことができるのだ。」<sup>(2)</sup> 一度「物語」の危険性に気づいた読者は、この文章から言葉の功罪両方を読み取ることができるだろう。

(1) 山極寿一『森の声、ゴリラの目 人類の本質を未来へつなぐ』二〇二四年二月六日 小学館新書

・教材化の分析

本教材は「言葉」や、「言葉」から作られる「物語」を盲目的に信じることの危うさを論じており、そのテーマは、世の中を批判的な視点で観察する視点を養ったり、「言葉」を醸成したりすることが求められる中学生に適した教材である。また筆者は主張を伝えるために、具体と抽象や原因と結果など論理の展開に工夫を凝らしている。明快な論旨が特徴であるため、原因と結果、意見と根拠、具体と抽象などの関係に着目して、論理の展開を捉えたり、論理の展開に説得力を持たせるための工夫を見つけ出したりすることに適している。

3、単元の目標

「筆者の主張や論理の展開について、具体と抽象の関係を学ぶことを通して、論理の展開に説得力を持たせる文章を書くための力を育む。」

4、本単元における言語活動

本単元においては、第 4 時、第 5 時に山極寿一の著作を読み、考えを広げる活動や、その主張をもとに意見文を書く活動を行う。これらの活動を通して、考えを深化させる力や自らの思いを表す言葉を精査する力、具体・抽象を実際に運用する力を磨く。

5、単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めようとしている。(情報(2)ア)	①文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えようとしている。(C(1)ア) ②文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見を持つようとしている。(C(1)オ)	①進んで文章の構成や筆者の問題意識について捉えようとしている。 ②文章を読んで得た学びを自らの生活や文章に活かそうとしている。

6、単元の全体計画(全5時)

次	時	ねらいと学習内容	○指導上の留意点 ☆評価規準・評価方法等
一次	1時	【ねらい】本文全体の内容を理解し、筆者の問題意識や、論理の展開の枠組みを捉える。 【内容】範読を聞く。筆者の問題意識を捉え、本文の構成を確認する。序論、本論、結論を班ごとに話し合い、分ける。	○写真、動画などの資料を効果的に用いて、生徒の関心を高める。 ☆(主①)進んで文章の構成や筆者の問題意識について捉えようとしている。(ワークシート、発言、見取り)

二 次	2 時	<p>【ねらい】論理の展開の大枠を捉える。</p> <p>【内容】具体と抽象の関係について、班ごとに内容を読み取り図示する。</p>	<p>○具体と抽象について、図式化して視覚的に示す。</p> <p>○論理の展開を踏まえ、筆者の主張を捉えるように促す。</p> <p>☆（知・技①）具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めようとしている。（ワークシート、発言）</p> <p>☆（思・判・表①）文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えようとしている。（ワークシート、発言、見取り）</p>
	3 時	<p>【ねらい】論理の展開をまとめ、筆者の主張を捉える。</p> <p>【内容】筆者は「物語」を超えて真実を知るためにどうすべきだと主張しているか、筆者の主張を捉える。</p>	<p>☆（思・判・表①）文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えようとしている。（ワークシート、発言、見取り）</p>
	4 時	<p>【ねらい】筆者の他の著作を読んだり、現代に見られる「物語」を考えたりしながら、筆者の著作を読み、意見文の骨子をつくる。</p> <p>【内容】筆者の他の著作を読み、その感想や印象に残った言葉から、意見文の骨子をつくる。考えがまとまった人は意見文を書き始める。</p>	<p>○筆者の主張から、自らの主張を醸成することができるように支援する。</p> <p>○文章を読む抵抗感をなくすため、交流の活動を行う。</p> <p>☆（思・判・表②）文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見を持とうとしている。（成果物、見取り）</p>
	5 時	<p>【ねらい】筆者の主張について、単元で学んだ文章の工夫を活かして自らの意見をまとめる。</p> <p>【内容】筆者の主張について考え、自らの主張を述べる意見文を書く。筆者の言説や、筆者が執筆した本に触れる機会をつくる。</p>	<p>○構成シートをもとに書くことができるように準備をする。</p> <p>☆（主②）文章を読んで得た学びを自らの生活や文章に活かそうとしている。（成果物、見取り）</p>

## 7、本時の学習

### （1）本時のねらい

筆者の他の著作を読み、自らの主張を考えながら、意見文の骨組みを作る。

### （2）本時の展開（4/5時）

	指導事項	学習活動（◆反応予想）	指導上の留意点 ●留意点○手立て☆評価
導入 5分	1) 前回の振り返り	<p>1) 前回の学びについて振り返る。</p> <p>◆具体と抽象の関係を確認した。</p> <p>◆言葉の選択には筆者の意図があった。</p> <p>◆序論、本論、結論には、それぞれ話題提示、具体例、主張（まとめ）などの役割があった。</p>	

	2) 本時の確認	2) 本時の進め方を確認する。	
展開Ⅰ 25 分	1) 考えを広げる。	<p>1) 筆者の主張に基づく意見文を書くために、筆者の他の著作にふれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジグソー法を用いて、山極氏が執筆した 3 冊から引用した文章を読む。</li> <li>(書かれている内容、筆者の主張)</li> <li>・『スマホを捨てたい子どもたち 野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』p.64-67,p.147-152</li> <li>・『京大式 おもしろ勉強法』p.131-132,p.137-141</li> <li>・『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』p.14-17,p.69-72</li> </ul> <p>2) ホームの班で共有する。</p> <p>◆『京大式 おもしろ勉強法』では、音楽や所有について話されていた。筆者は、言葉よりも音楽のほうが心と心を結びつけ、身体と身体を結びつける力を持っていることや、「自分たちの利益を守るために」という文言しか育たない精神の問題があることについて主張している。</p>	<p>○B4 用紙に印刷したものを配布し、生徒が手元で見ることができるようにする。</p> <p>●教師が山極氏の著作から 3 冊選定したものから、それぞれまとまった 2 つの文章を提示する。</p> <p>●それぞれの班の人数がおおむね同数になるように調整する。</p> <p>●前時の筆者の主張の要約を行った経験を活かし、要約を行うように周知する。</p>
展開Ⅱ 18 分	2) 意見文を書く準備をする。	<p>1) 意見文を書くときの周囲点を聞く。</p> <p>◆具体と抽象を意識する。</p> <p>2) 山極の文章を読み、ワークシートに記入する。</p> <p>◆「どんな言葉巧みな演説も音楽にはかないません」という言葉が印象に残った。</p> <p>◆コミュニケーションは情報交換にとどまらず、心と心の触れ合いである。言葉のみがコミュニケーションの手段ではない。</p> <p>◆合唱の練習でも、クラスがまとまり、心が一つになったような感覚があった。</p> <p>3) 序論・本論・結論の構成や、具体と抽象、言葉の選択を意識しながら、400 字程度の意見文を書く。</p>	<p>○文章を読むことが苦手な生徒については、読みやすいものを進めたり、教科書で書くことを認めたりする。</p> <p>○具体的な事例について、個別指導をしながら考えることを補助する。</p> <p>●ワークシートへの記入が終わった生徒については、個別に内容を確認する。</p> <p>●内容の確認が終わった生徒については、意見文を書く活動に移るように伝える。</p> <p>●意見文については、ICT 機器を用いても、原</p>

			<p>稿用紙を用いても良いことを伝え、自分に合ったものを選択させる。</p> <p>☆（思・判・表②）文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見を持とうとしている。（成果物、見取り）</p>
まとめ 2分	1）本時の振り返りと次時の予告	1）本時の学びを振り返り、次時の学習内容を知る。	○次時では、意見文を完成させ、交流する活動を行うことを伝え、次時への見通しを持たせる。

8、板書計画

序論、本論、結論を意識する。

※意見文を書くときの注意点は

④「作られた「物語」を超えて」

③「ゴリラからの警告」「人間社会、ここがわかる」

②「京大式 おもしろ勉強法」

①「スマホを捨てた子どもたち 野生に学ぶ 未知の時代」の生き方

本時の流れ

- 1. 班①で山極寿一の著作を読む。
- 2. 班②で読み取った内容を紹介する。(1分ずつ)
- 3. 意見文の骨子をつくる。(ワークシート)
- (4. 意見文を書く。)

作られた「物語」を超えて

山極寿一





ガボンのムカバのキャンパス（中野 啓典氏提供）

自信のつけ方——精神的成長のすゝめ

フォッシーの言いつけを守らなかったこともそうだが、私は子どものころから、自分が正しいと思うことを選んできたほうだとは思っています。でも、昔の人はほとんどそうだったのではないのでしょうか。目の前にいる相手と、その場で付き

合っていた時代には、自分で判断し、自分が正しいと思うことを選ぶはかたいのですから。今なら、ちよつとトイレに行きます」などと遠慮し、知り合いに「今、こんな話し合いをしているんだけど、どう思う？」と携帯電話で相談できるかもしれません。固定電話しかない時代はそう簡単にはいきません。対面している場で話すことがすべて。私が大学生のころもそうでした。その場での付き合いが基本的に決まることがほとんどです。携帯電話が普及したののち、本音は自分で決定すべきことが山ほどあるはず。それなら、いっそのこと自ら進んで孤独になってみてはどうでしょうか。携帯電話が常にオンの状態ということは、人間関係が常にオンだということ。これで孤独になりようがありません。孤独になるということは、何かに打ち込みの状況をつくり出すことでもある。孤独になれば、自分で責任を負うこともできる。

もし誰かの助けを受けて失敗したとしても、自分に逃げ道をつくることになりかねません。これはあいつの意見であって、自分のせいじゃない、とでも、最終的に決定したのは自分でもないので、責任を負うのも当然。自分以外にないはず。携帯電話が常にオンの状態というのは、そういうことをきくと考える時もあるけれど、いいというところなのです。

ここで言う孤独とは、一人で二重を食うというような物理的な孤独ではなくて、自分一人で物事を考える、携帯電話の状態で自分だけの時間を持つという精神的な孤独のこと。大事なものは、たくさん仲間がいても、何かを決定するときは自分で考えるということ。今の若者たちは、もしかしたら孤独にさらされても大丈夫と思っているかもしれない。携帯電話のメールが来たなら、すぐに返さなければ村八分にされる恐れがあるでしょう。

思い切った携帯電話の断りをあえて断り切り、いったん友人や関係者をゼロにしたうえで、自分で本音に大切な人間関係を築いていくことができれば、それにこしたことはない。でも、そのときには携帯電話という手段に頼り続けていることも含めて、自分で責任を負う関係性を見つめることが必要です。

自分が面白いと思ったこと、正しいと思ったこと、その場で自分で決定する。そのうえで慎重な判断は後にも自分で行ってきたことですから、自信を持って他人に話します。自分というものは、そうした積み重ねによってつくられるのだと思うのです。それは誰かが断言をつくらなくても、何年も時間のかかるプロセスしたまふかもを助けてくれる。でも、どこかで自分の血となり、肉となつて、回り回ってそれが未来の自分を助けてくれる。自分を運ぶ、自分というものは自分のしてきたことと成り立っているのですから、過去を美化することもなければ、過去を灰色にすることもできないということ。そういう断片化のきかない自分というものに誇りを持って相手に押しつけない、対等な話し合い、ということなのではないでしょうか。

もちろん自信なんて、そう簡単につくものではない。私も若いころには、物事が思うようにならずにジタバタしてふたり、落ち込みたり……。今でも悩みは尽きません。それでもやっぱり道を歩くときは歩かないのです。なぜなら自分というものは、そういうふうにならず、つくれないものなのですから。

情報化社会の行き先は先にあるデストピア

少し前までは、どこかでおせっかいなおとなたち、あるいは、おせっかいな年上の子どもたちが出てきて、信頼がつけられたり、不安が解消されたりしていたように思っています。弱き時代の子どもたちが社会から切り離されていなかった。ところが、ネットワーク社会となった今、彼らをつなぎとめる社会の仕組みがなくなりつつあります。

インターネット社会では、他者の目が見えたり監視の暴力となつて個人にのしかかります。生身の人間としてつながる社会ではなく、点としてインターネットに浮かぶ存在となつたために、すべては個人に帰せられ、決断も個人に九割けされています。自己実現、自己責任が問われるのは、ネット社会ゆえでしょう。世界に点としての自分しかないければ、他者に責任を預けるわけにはいきません。もちろん、誰かに責任を預けることはできるかもしれませんが、運命はできません。だから孤独になつていく。

このまま進めば、社会は、自分の欲求だけを信じ、他人のことなどどうでもいいという個人の集合体になつてしまふ可能性が有ります。自分にとっての敵を共同で排除するため、もしくは自分の利益になる存在だからつながる。他者

とつながることにそうした意味を求める利益中心の共同体ができつつあります。国連のユネスコをはじめさまざまな組織が、「誰一人として取り残されない社会の実現を目指す」ことを課題に掲げていますが、こうしたことをこぞつて言い始めたのは、世界が今、それは逆の方向に向かっている証しでしょう。

特に若い世代は、取り残されたくないという不安を抱えているように思います。他者に頼ることができなくなっているのです。保険という仕組みがあるのは、信頼関係で結ばれた共同体が機能しなくなっているからでしょう。人間が信頼し合っていたら、困った誰かが助けてくれるわけですから保険などかける必要はありません。個人が困ったときに誰か助けてくれない可能性があるからこそ保険をかける必要が生まれているわけです。頼れるものが何もない中、個人が取り残され、格差が増大する。それは、情報化社会の行き先デストピアです。

リアルな付き合いでギクシャクしてある

リアルな付き合いでギクシャクしてある

リアルな付き合いでギクシャクしてある

情報交換をするためのツールとして電話やメール、インターネットが登場したといつても、ひと昔前までは最初に人間の五感がありました。ところが、今は生まれたときからインターネットのフィクションの社会があります。まずはインターネットを通して世界を知り、次に生の経験をする。かつてとは順序が逆です。そして、先に存在するフィクションとしての世界は、自分の好きな情報でつくられた世界です。それは本来、他者と共有できるものではないのに、デジタル世代の子どもたちは、その構築された世界の中で見聞する情報を互いに交換している。自分で見た世界の情報を交換していた時代の人間とは違い

フィクションの世界での経験だけを積み重ねていると、繰り返しも再現もできないリアルな世界とすり合わせることもできなくなります。リアルな世界では、失敗しても前に戻れないし、傷つきもする。なぜ、フィクションの世界のように自分の思い通りにいかないのか悩みます。そして、わがわがなくなつて暴力を振るったり、泣き叫んだり、閉じこもつたりしてしまふ。

こんなはずではなかつたと思う前に、生の世界を直観力で切り抜ける能力を磨かないといけません。そのためには、現実の世界と身体を使ったリアルな付き合いをする必要があります。実際のフィジカルな接触でも、声だけのやり取りでも、気配を感じるだけでもいい。インターネットで情報をやり取りして終わりではなく、会って、作業をともにして、相手の世界の中に入って、ときにギクシャクしてみる。そうすると、いろいろな感情が芽生えます。相手に受け入れられる、拒否される、裏切られる。こうしたことを繰り返して、人間と人間が付き合うということはどういうことなのだと学んでいく。

こうして自分の価値が単純なものではなく、さまざまな受け取られるものであることがわかっていくのです。自分を受け入れる友だちだけと付き合っているだけでは生きる意味がわかっていくとそうではありません。いろいろな人間関係があるからこそ、自分が存続できます。人間は他者の評価によってつくられるのです。だから、いろいろな自分をつくっておかないと、ある特定の個人が自分を拒否、否定したら自分はいなくなってしまう。自分を支え、自分に期待してくれる人がいろいろいるからこそ、どこかで信頼を失つても、どこかで関係が断れてしまつても、生きられるのです。

山極寿一『スマホを捨てた子どもたち  
野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』  
二〇二〇年六月八日





闇を歩む人々に入れたことで、人間は自然の力をさらに知った。ともに進むことで知られる一歩はアフリカを歩む人々

人をつくるのは音楽より音楽

音楽のようなものが人間に生まれると、お互いの間にあった壁が取り除かれ、あたかも肩を揃えたり、抱擁したりしたかのような一体感が生まれます。心を一つにしたような共感と愛しい思いでいいでしょう。それは、相手への理解が高まったからではなく、音楽によって身体がつながり合っているような感覚を覚えるためだともいえます。つまり音楽は、身体がつながっているのではなく、つながっているように思える音のコミュニケーションだということ。これは、現代の若者たちにも理解できる感覚ではないでしょうか。一緒に声を出して歌うことだけでなく、同じ音楽を聴くだけでも関係できます。レクイエムや行進曲といった歌詞のない音楽も、聞いているだけで気持ちが揺り動かされます。心と心を結びつけ、身体と身体を結びつける力をもっているのです。音楽の誕生は、人類進化史上、とても重要な出来事だったと私は思っています。音楽は、人間が生れる以前から、人間が手にした大事なコミュニケーションツールであり、人間が大きな社会力をもつ源泉になってきたのです。人々の心や身体を調和させるのは音楽だけではありません。スポーツもそうです。しかも、たとえ一緒にサッカーをしなくても、サッカーの試合会場では、観客とともにウェーブをするだけでも高揚します。そういう仕掛けが人間の社会にはたくさん埋め込まれている。だから人間は大きな社会性をもつことができるのです。これは人間にしかない特徴です。

「共にいる」動物を調和させるのは音楽

人間は「共に生きる」という感覚なしには幸福を感じられない動物だとつくづく感じます。それはそもそも人間の空気がそうだからです。だから、自分が行う行為の先には常に相手がいる。物理的には離れていても、神であつたり、不特定多数の世間のような何かしらの手が必ず必要なのです。そのなかで自分がつくられていく、自分が自分を定義するだけの成り立たない社会を生きているから、誰かという感覚が常につきまといつていく。子どもといふ、若人といふ、あるいは誰かという一線に居ることもある。いずれにせよ、決して一人ではない。誰かがいるという、そういう世界。人間というのはもともと社会的な動物なんです。

もし引きこもってしまえば、いさゝか人間を遠ざけてしまったとしたら、そもそも人間であることと否定的に考えることも難いからいけません。なにもしないままコミュニケーションが取れなくなっていくのです。少なくとも誰かが共にいるという感覚を受け入れることができれば、もつと究極的なことを言えば「誰か」は人間でなくてもいいのかもしれない。そばに生き物がいることを受け入れられれば大丈夫です。でも、それすら拒否し始めたら危ういかもしれません。

たとえば、子どもがいなかったり、わが子が独り立ちして二人だけで暮らす夫婦が、ベ

ットを飼うケースは少なくありません。ともすれば、子どもの代わりに可愛がっていると思われがちですが、実は違うのではないかと私は思っています。

夫婦二人だけでいること、そこに子どもがいることでは、ずいぶん違います。なぜなら、大人の愛とは違う生き物がそばにいるからです。すると、大人はそこに注意を向けざるを得なくなる。その瞬間、夫婦二人は同じ世界の中にいるということを感じ取るのです。そういう意味ではベットの存在も同じこと。だから、若い合意などをした後で、ちよつと二人の間の空気がギクシャクして相手のことを「ああ、やっぱりオレとは違う世界の人間なんだな」と思ったとしても、そこに子どもが入り込むことによって、子どもから見ればそれは同じ世界なんだと実感できるというわけです。

アフリカではさまざまな民族の人たちと共にベリッラを遊んでいたが、なかには敵対し合っている民族もいました。でも、ゴリラを共に見ることで、やっぱりオレたちは同じ人間なんだという気持ちになる。それまでのわだかまりを超えて協力し合える。そういう感覚が人間には備わっているのです。

日本人同士で接することがあつたとしても、アメリカ人やイギリス人がそこにいれば、途端にオレたちは日本人だという感覚が顔を出す。自分たちとは異なる存在が目に見えることで同族意識が芽生え、逆巻意識が燃え上がるということも、人間はいつの時代でも経験してきました。

逆に言えば、人間にはそれを利用してきた歴史がある。「エイリアンの襲撃」のような映画はなくなりませんし、日本が戦時中に掲げていた「東洋共栄」というスローガンもそうです。敵をつくることで味方をつくり固結させようとする。恐ろしいことですが、こんなふうに人間がもともと持っている自然な心を悪用しようと思えば、割合簡単にできてしまうのです。

二〇〇一年にアメリカで起きた同時多発テロのあと、ブッシュ大統領はテロ組織とそれを支援する国家を許さないと宣言し、各地に闘いを挑み、あなたは私たちの敵ですか？ それとも味方ですか？ と、境界を引いて敵味方を分けるということ。人間が犯してしまいがちな行為です。でも、それはそもそも誤った考え方、人間が陥りやすい間違ったことを決して忘れないでほしい。

こうした歴史を、人間が生きていく中で繰り返してはならない。人間はいつの時代でも経験してきました。

す。つまり、価値を守るために人々は進歩しようとし始めた。ここという進歩とは自分たちが有利になるように、同じような欲望を持った他の人々を押しのけようとする行為です。そして、そこに「われわれ」と「彼ら」のような明確な差別化を見出したのです。

人間が長いこと続けてきた狩猟採集の社会では、土地に食べ物がなくなればあちこちを移動しながら生活をしていました。今でも狩猟採集を続けているピグミーやサン人などは、ツシュマンサン人は、数百年から一〇〇〇平方キロメートルから一〇〇〇平方キロメートルほどの地を食糧を求めて移動しています。国や領土を家を持っていません。価値が固定されて移動することはありませんでした。

そういう世界から、ある特定の土地に大きな価値が生じ、そこで利益を上げながら、仲間で協力してその利益を守ろうという「所有」の精神が次第に発達したことで、境界の内と外という発想が生まれてきました。

しかし、人間の長い歴史に比べると、農耕が発達してからせいぜい一万二〇〇〇年程度で、農耕を明確にしたように、人間が発見した資源によってわれわれは幻想を持たされているだけ。だから、他の国の人々でも個人的に食って付く争いばかりにならざるを得ない。国という幻想の神の中に押し込められ、国や民族の単位で相手を敵視してしまうことがあるのです。

問題は勝つか、負けるかという単純な解決策がないと考えるところにあります。勝つためには他の国と勢力がないといけない。勢力を拡大しないといけない。果たしてそうなのだろうか？ 勝つか、負けるかの二択しかないのでしょうか？ 土地の所有を巡る問題にしても、共同で利用することを提案することだってできるかもしれない。むしろ、真の問題は「自分たちの利益を守るために」という文言が育たない精神のほうにあるのではないのでしょうか。

山極寿一「京大式おもろい勉強法」  
二〇一五年二月三〇日朝日新聞出版



だれと食べるかという問題

（簡便以外の動物にとつて、生きることは食べることであり、しかし、それを実現する「いつ、どこで、何を、だれと、どうやって食べるか」という五つの問題を乗り越さねばならない。現代の科学技術と流通革命は、その多くを個人の自由になるように解して来た。24時間営業のコンビニエンスストアや自動販売機、車や飛行機などの輸送手段、インターネットを利用した通信手段、電子レンジやファストフードなどの調理手段、これらは私たちが、いつでも、どこでも、どんなものでも、好きなように食べることを可能にした。

しかし、技術によっては食べられない課題もある。それは、だれと食べるかという問題だ。だれと食生活をしていくマヤカモシカのような動物には、この課題は必要ない。わばりをつくって他者の侵入を防いだり、他者と出会うまいようにして餌資源を確保したりすればいいからだ。しかし、群れをつくる動物は常にこの問題に直面する。とりわけ人間は社会生活を営む人間にとつて、いっしょに食べる相手は重要である。もちろん、移動手段の革新によつて、遠くに住む人や異性に会うことができるようになった。だが、だれと食卓を囲むかは、昔も今も個人の自由裁量によつては決められない。

古来、人間の食卓には、栄養の供給以外にも他者との関係の維持や調整という機能が与えられてきた。いやむしろ、他者との関係をつくるために食事の場や調理、食器、メニュー、調理法、服従からマナーにいたるまで、多様な技術が考案されてきたといつても過言ではない。どの文化でも社交の場として食事を機能させるために、莫大の時間と金を消費してきたのである。それは効率化とはむしろ逆行する特徴をもっている。サルの食事は人間とは正反対である。群れで暮らすサルたちは、食べるときは分散して、なるべく仲間と離れ合はせようとする。数や場所が限られている自然の食物を食べても、自分と都合のいい仲間とは合せてけんかになる。だから、仲間がすまないと、自分と都合のいい仲間を求めようとする。つまり、現代の私たちはサルの社会に似た閉鎖的な個人主義社会を求めているように見えるのだ。

で占有している場所は限られて、別の場所へ食物を探そうとするのだ。でも、あまり広く分散すると、肉食動物や猛禽類にねらわれて命を落とすおそれが生じる。仲間といれば外敵の発見効率が上がるし、自分がねらわれる確率が下がる。そこで、仲間と適当な距離を置いて食事をすることになる。

しかし、食物が限られていけば、仲間と出くわしてしまふことはある。そのときは、弱いほうのサルが食物から手を引く。強いサルに場所を譲る。サルたちは互いにどちらが強いかわきあひをよくなまえていて、その序列にしたがって行動する。それに反するよう行動をとると、周りのサルが寄つてたがってそれをとがめる。優秀の序列を守るように、勝者に味方するのである。

14

15

から見たらどんな行爲である。なぜこんなこと人間はわざわざ時間をかけるのだろうか。それは、相手とじっくり向かい合ひ、気持ちを通じ合はせながら信頼関係を築くためである。私は思う。相手と親しいような食事をあえて間に置き、けんかをせずに平和な関係であることを前提にして、食べる行為を調整させることが大切なのだ。同じ物をいっしょに食べることによつて、食べる行為を調整させることが大切なのだ。それが信頼する気持ち、ともに歩もうとする気持ちを生み出すのだと思う。

ところが、前述した近年の技術はこの人間的な食事の時間を短縮させ、個食を増加させて社会関係の構築を妨げているように見える。自分の好きなものを好きな時間と場所で好きなように食べるには、むしろ相手がいないほうがいい。そう考える人が増えているのではないだろうか。

でも、それは私たちがこれまで食事で育ててきた共感能力や連帯能力を低下させる。個人の利益だけを追求する気持ちが強まり、仲間と仲間、仲間のために何かをしてあげたいという心が弱くなる。勝ち負けが気になり、勝ち負けに勝つとすると仲間が遠ざかる。自分と都合のいい仲間を求めようとする。つまり、現代の私たちはサルの社会に似た閉鎖的な個人主義社会を求めているように見えるのだ。

今、私たちは経済的な時間を生きている。そして、自分が自由に使える時間を欲しがっている。しかし、自分の時間とはいったいどういう状態のことをいうのだろうか。それをどう過ごしたら、幸せな気分になれるのだろうか。

69

70

が生じた。つまり、時間ばかりがコストであり金に換算するようになった。しかし、物質の流通や情報技術の高度化を通じて時間を節約した結果、自分だけの時間を同じように効率化の対象にしてしまった。自分の欲求を最大限に満たすために、効率的な過ごし方を考える。映画を見て、スポーツを観戦し、ショッピングを楽しんで、ぜいたくな食事を食べる。自分で稼いだ金で、どれだけ自分がやりたいことが可能かを考える。でも、それは自分が節約した時間と同じ考え方で、いつまでも満たされることがない。それはばかりか、自分の時間が増えれば増えほど、いつまで経っても時間をもてあますようになる。

それは、そもそも人間がひとりり時間を使うようにできていないからである。70万の進化の過程で、人間は高い共感力を手に入れた。他者のなかに自分を見出す。なり、他者の目でも自分を定義するようになった。ひとりりでも、親しい仲間のことを考える。隣人たちの喜怒哀楽に大きく影響される。ゴリラ以上に、人間は時間と重ね合わせて生きているのである。仲間と自分の時間をさしだし、仲間からも時間もらいながら、互酬性にもとづいた暮らしを営んできたのだ。幸福は仲間とつながることで、信頼は金や言葉ではなく、ともに生きた時間によつて強められるものである。

世界は今、多くの敵意に満ちており、孤独な人間が増えている。それは経済的な概念によつてつくりだされたものだ。それを社会的な時間に変えて、いのちをつなぐ時間ととりもどすことが必要ではないだろうか。ゴリラと同じように、敵意はともにい時間によつて解消できると思うからである。

山極寿一「ゴリラからの警告」人間社会、ここがおかしい山二〇八年四月三〇日 毎日新聞出版

72



ワークシート ( ) (組) (番) ( )

○山極の主張に基づく意見文を書くために、意見文の骨子をつくろう。

①印象に残った筆者（山極寿一）の言葉や、筆者の主張を書きましよう。

②①から生まれる、自分自身の意見（主張）を考えて書きましよう。

③自分の意見を裏付ける具体的な事例や体験談などを考えて書きましよう。

「シン・言葉をつかむ」意見文の手引き

○山極寿一の他の著作を読み、「作られた「物語」を超えて」から学んだ構成の工夫や言葉の選択を用いて、筆者の主張に基づく意見文を書く。

序論	本論	結論
導入 話題提示・問題提起など	具体的な説明 ・事例 ・問い・答え ・理由 など	筆者の主張など
「どんなに言葉巧みな演説も音楽にはかないません。」と山極寿一は『京大式 おもしろ勉強法』で述べている。音楽は、コミュニケーションツールとして言語より勝っているのだろうか。	現在世田谷中学校で行われている芸術発表会の合唱練習を思い浮かべてほしい。ピアノの調べに乗って声を合わせて歌う、その時、我と彼の区別なくひとつのエネルギー体に変身している自分に気づく瞬間を体験していないか。言葉の壁をやすやすと越える音楽の力は、肉体に潜む原始からの記憶を瞬間的によみがえらせる。その音やリズムの中で同じ方向を目指すのだから、まさに無敵の仲間意識に包まれると言えるだろう。事実、教育実習中の私にさえクラスの団結力が日に日に高まってくる様子が感じられる。	私も山極寿一と同じく、コミュニケーションは単なる情報交換でなく、心の触れ合いであると考えている。ぜひ中学生の豊かな感受性を言葉（＝左脳）だけでなく、音楽やスポーツ、ダンスなど（＝右脳）を仲間と体験することによって、さらに磨いてほしい。